

パット・ブキャナン『西洋の死』とトランプ主義の起源 ——文化戦争とパレオコンの思想——

The Death of the West : Pat Buchanan and the Origins of Trumpism

人文学系教授 西岡 達裕

キーワード：パット・ブキャナン、旧保守主義、トランプ、反移民、ポリティカル・コレク
トネス、文化マルクス主義、白人国家主義、アメリカ・ファースト

はじめに

2016年大統領選挙の最中、「トランプは好機に恵まれたパット・ブキャナンだ」⁽¹⁾という記事がアメリカの政治専門誌に掲載された。冷戦の終結後、ブキャナン(Patrick J. Buchanan)は現職のブッシュ大統領のグローバル化路線に対抗して「アメリカ・ファースト」を掲げて、1992年大統領選の共和党予備選挙に挑んで敗れ去ったが⁽²⁾、トランプは四半世紀後に同じスローガンを掲げて見事指名を勝ち取ることに成功したからである。

ブキャナンは政治思想の面でパレオコン(paleoconservatism、旧保守主義)⁽³⁾に分類されるコラムニスト、政治家、著述家、政治コメンテーター、テレビキャスターである。彼はアメリカ社会と西洋の伝統を重視する保守主義者として、キリスト教徒である白人を中心に築かれてきた西洋文明が大きく変容し、存続の危機にあると訴えてきた。そのような彼の立場からすれば、多文化主義をふりかざすリベラルも、グローバル化を強行するネオコン(新保守主義)も、西洋文明の変容を促進し、西洋を「死」に至らしめる敵にほかならない。

この小論は、トランプ主義の源流を訪ねるという観点から、2002年に刊行された彼の著作『西洋の死——人口減少と移民はどのように我々の国と文明を危険にさらすか』⁽⁴⁾を中心にブキャナンの思想をとりあげる。ブキャナンは同書の刊行前、そこに示された危機感を背景として、自ら1992年、1996年、2000年の大統領選挙に出馬し、トランプと同じように反移民や保護主義など反グローバリズムの政策を唱道してきた。そこで、アメリカ保守思想史の代表的な研究者ナッシュ(George H. Nash)は、トランプ主義の原型を1990年代のブキャナンとペロー(Ross Perot)の選挙戦に求めている⁽⁵⁾。

トランプとブキャナンの間には、2000年大統領選挙で改革党の候補者指名を争ったという因縁がある。そのときトランプは彼のことを「ヒトラー崇拜者」であり、ユダヤ人、黒人、同性

愛者に対する差別主義者であると非難し、「こんなやつを抱擁できる人がいるとしたら、まったく信じがたいことだ」⁽⁶⁾と、これ以上ない侮蔑的な言葉を使って罵倒した。そのトランプが2016年選挙では「アメリカ・ファースト」を掲げて、反移民や保護主義をはじめブキャナンとほとんど同じ政策を打ち出すことになったのは皮肉である。

ただ、意外にもその間の経緯として、2011年にトランプの方からブキャナンに和解を申し出ていたことが確認されている。彼は突然ブキャナンに電話をかけて、2000年選挙当時の無礼を詫び、ブキャナンに許しを請うたのである。トランプがまったく彼らしからぬそのような行動に出たのは、おそらくその時点ですでに2012年ないし2016年大統領選挙への出馬を睨んで、ブキャナンの選挙戦術を借用するつもりであったからであろう。ブキャナンはすぐに彼を許し、2016年選挙戦の開幕当初からトランプを支持してきた。選挙中も何度かやりとりがあり、選挙後のインタビューでブキャナンはトランプが彼のスローガンを使ったことについて「こんなに嬉しいことはないよ (It just doesn't get any better than this.)」と答えている⁽⁷⁾。

筆者は、トランプに一貫した政治思想があることを想定していない。むしろトランプ主義とは、本質的には機会主義的なポピュリズムであり、ポピュリストとして支持を広げるためにパレオコンの思想と政策を利用してつくられた政治姿勢であるととらえている。以下では、『西洋の死』を中心に、トランプ主義に影響を与えたと見られるブキャナンの思想と政策の来歴・内容・影響について考察する。

1. 大統領選挙への3度の出馬

ブキャナンは1938年、南部出身のアイランド系カトリックの大家族に生まれ、保守的な家庭環境の中で育った。コロンビア大学ジャーナリズム大学院を修了して新聞社に勤めた後、ニクソン大統領の特別補佐官、レーガン政権のホワイトハウス広報部長などを歴任した⁽⁸⁾。彼の見方によれば、共和党は北部のカトリック系と南部のプロテスタントをニューディール連合から離反させるニクソン陣営の選挙戦略が功を奏し、1968年から1986年まで「ニクソン＝レーガン連合」と呼ぶべき支持基盤によって大統領選挙で6選5勝と大きく勝ち越したが、1992年選挙では1965年移民法の影響がたたって連勝を止められた。そして、問題は、共和党の支持基盤であるヨーロッパ系アメリカ人が2050年までにマイノリティに転落する見込みだということに、共和党もそのような移民政策を容認してきたことである⁽⁹⁾。

ブキャナンが1992年大統領選挙に出馬した背景には、冷戦の終結によってアメリカが「極めて重要な岐路」⁽¹⁰⁾に立たされているという認識があった。1990年、彼は『ナショナル・インタレスト』誌において、冷戦が終結した今やアメリカは国益とかわからないような海外の出来事にむやみに首を突っ込むべきでなく、アメリカ・ファーストの外交を採用すべきであると持論を展開した⁽¹¹⁾。ところが、その後ブッシュ政権は国際主義的な「新世界秩序」の構想を掲げて、1991年に湾岸戦争を戦うこととなった。ブキャナンから見れば、それは「アメリカを世界の警察官にするウィルソン主義の十字軍」⁽¹²⁾であり、帝國的で傲慢な外交につながるおそれのあるものであった。そこで、ブキャナンは、「我々の間の相違はあまりにも深い」「彼は

グローバリストであり、我々はナショナリストだ」として、現職のブッシュ大統領に対抗すべく共和党予備選挙への出馬を表明したのである。

ブキャナンの「アメリカ・ファースト」は戦前の孤立主義と不介入主義の外交を思い出させるものであり、共和党主流派はそれを支持しなかった。ただし、彼の主張の中には、有権者にとっては支持できる内容も含まれていた。すなわち、世界中の人々のためにアメリカが冷戦を戦ってそれに勝利した今や、同盟国であっても不公正な貿易を許さず、日本やドイツには経済力に見合った防衛費を負担させ、海外への援助を減らし、「忘れられたアメリカ人の権利に気を配ることを始めねばならない」⁽¹³⁾ という主張である。2016年選挙でトランプが鸚鵡返しのように繰り返したこれらの主張は、経済ナショナリズムというべき側面を持つが、社会問題における彼の保守的な態度とともに、共和党支持者の間で一定の共感を集めた。実際、自党内の対立候補に現職大統領がいる予備選挙でブキャナンが23パーセントの得票率を上げたことは、十分に善戦したと評価できるだろう。

アメリカ経済が不振にあえいでいたその当時、経済ナショナリズムに基づく反グローバリズムの主張が労働者層の間で一定の支持を得ていたことは、反NAFTAと保護貿易を正面から訴えた無所属候補のペローが大旋風を巻き起こした事実がはっきりと示している。ペローはその後、改革党を旗揚げした。しかし、アメリカ経済は長期的な好況に転じ、1996年選挙ではブキャナンもペローも前回ほどの成果を上げることができなかった。2000年大統領選挙では、ブキャナンはペローの誘いを受けて改革党から出馬したものの⁽¹⁴⁾、アメリカ経済が活況を呈する中で、国民からの支持は無残に消えた。

2000年大統領選挙では、8年ぶりに共和党のG・W・ブッシュが勝利し、議会選挙でも共和党が勝利した。政府・議会に経済保守やネオコンが結集する中で、レーガンもなしえなかった保守革命の夢が実現されるという期待が膨らんだ。そうした中で、保守派の内部闘争に敗れたブキャナンは、地下室にこもって『西洋の死』の執筆にとりかかった。彼は、自由貿易か保護貿易かの戦いで共和党主流派に敗れ、介入主義か不介入主義かの戦いでネオコンに敗れたのだが、それと同時に問題なのはG・W・ブッシュ政権が人種や移民の問題で寛容な態度を示していたことであった。彼は、共和党の勝利と経済の繁栄にかかわらず、「西洋の死」が近づいていることについて警鐘を鳴らす必要があると考えた。

2. 文化戦争の号令

「これが世界の終わり方。華々しく散るでもなく、情けなく」。『西洋の死』の冒頭には、保守の思想家としても知られるエリオット (T. S. Eliot) の詩の一節が引用されている。シュベングラ (Oswald Spengler) の『西洋の没落』が第一次世界大戦に敗北したドイツで刊行され、ケネディ (Paul Kennedy) の『大国の興亡』が双子の赤字を抱えて覇権が揺らいだ1980年代のアメリカで刊行されたことは、時代の雰囲気として比較的にわかりやすい。しかし、なぜブキャナンは、いまや他の追隨を許さない圧倒的な力を取り戻したはずの2002年のアメリカで『西洋の死』を論じなければならなかったのか。それは、彼の関心が戦争による破局や経済の衰退では

なく、人口構成と文化的な変容によって、欧米社会の伝統が蝕まれていることにあったからである。

同書の序論で、彼はアメリカがいま「文化的・社会的な革命」の最中であって、2つに分裂したと指摘する。内陸部の田舎町に住む伝統的・保守的なキリスト教勢力と、東部と西部の沿岸地域に住む進歩的で非宗教的な勢力である。その裂け目をつくりだしたものは、所得やイデオロギーではなく、エスニシティと忠誠心である。1960年代以降、アメリカでは国民性の異なる非ヨーロッパ系移民の急増によって人口構成が激変し、かつ新世代のエリートがテレビや娯楽や教育を掌握して大衆の価値観の形成に多大な影響力を及ぼした結果、伝統的なキリスト教文化に代わる新しい大衆文化が急速に力をつけた。その結果、アメリカは人種・民族の上でも、また価値観や道徳の上でも、2つの国民に分裂したというのである。

ブキャナンはそこに「西洋の死」の影を見いだした。西洋キリスト教世界の伝統的な価値観は、文化の革命的变化を推進する新勢力によって否定され、神は地上に降ろされ、崇敬すべき歴史上の英雄は再解釈によって名声を傷つけられ、かつて正義や真実であったものが不正義や誤りと見なされるようになった。その一方で、乱交や妊娠中絶や自殺は、不道徳で恥ずべき行為ではなくなった。新しいエリート層が奉じる進歩的な価値観では、解放的な文化革命を促進するものが正義であり、それに異を唱えるものは古い考えに固執する偏狭な輩として白眼視され、時には悪魔であるかのように糾弾されるのであった⁽¹⁵⁾。

ところで、アメリカの文化戦争という概念が政治的に重要と見られるようになったのは、1991年に出版された社会学者ハンター（James Davison Hunter）の著作『文化戦争』⁽¹⁶⁾がきっかけであるが、政治の表舞台で保守の側から号令をかけたのはブキャナンその人である。彼は1992年共和党全国大会で、新世代のエリートを代表する民主党候補のビル・クリントンが制約なしに妊娠中絶や同性愛を支持し、妻のヒラリーが結婚を奴隷制に喩えるような急進的なフェミニストであることを批判して、学校と宗教、軍隊と性、ポルノの規制などの倫理的な争点に言及しつつ、アメリカの伝統的な社会のあり方を守るために、次のように宣戦布告したのである。

これは文化戦争です。それは冷戦がそうであったのと同じように、国家のあり方によっていずれ死活的な意味を持つようになることです。アメリカの魂を賭けたその戦いにおいて、クリントン夫婦は相対する側にあり、ジョージ・ブッシュは我々の側にいます。だからこそ、我々は故郷に戻り、彼を応援しなくてはなりません。⁽¹⁷⁾

ブキャナンは、予備選挙に出馬するに際してグローバリストのブッシュとの間の「相違はあまりにも深い」と述べたはずであった。しかし、彼にとってはそれ以上に、文化戦争における新世代のエリートとの対立の方が遙かに根深かったのである。

彼の「文化戦争」演説は戦闘的で憎悪に満ちたものとして物議を醸し、その後も彼は党内で異端児の扱いを受け続けた。共和党主流派の考えは、極右的な発言は穏健なインディペンデントの支持を失い、民主党を利することになるというものだからである。

ともあれ、ブキャナンはブッシュに同意できないという以上に、クリントンを嫌悪していた。それと同時に、クリントンが象徴する戦後世代の新しい文化に脅威を覚えた。彼の説明によれば、1960年代以降、欧米の若者を引きつけた新しい解放的な文化は毒性を持った「死の文化」であり、キリスト教的な倫理観と引き替えに、現世の快楽を追求するだけで子どもを増やそうとしない傾向を生み出している。そのため、西洋文明では人口減少が進み、ベストの大流行以来の存亡の危機に立たされている。それを埋め合わせるために第三世界から移民を受け入れることを続けなければ、それはもはや西洋でもなければアメリカでもなくなる。移民は「西洋の死」の解決策とはならず、むしろ主な原因の一つなのである。

新しい世代が文化革命を起こしたのは、1960年代の大学のキャンパスであった。その文化はやがて社会に根を張り、2000年までに欧米諸国で支配的となった。『西洋の死』は、その革命が何のために、何に由来して起きたのか、また、いかにして神を地上に引きずり下ろし、人々の考えを変化させ、若者を魅了したのかを、伝統主義的な保守の観点から説明しようと試みたものである⁽¹⁸⁾。

3. 『西洋の死——人口減少と移民はどのように我々の国と文明を危険にさらすか』

『西洋の死』の内容を紹介しよう。第1章は、まず人口統計を使って欧米諸国の少子化問題を取り上げ、ヨーロッパ人は絶滅危惧種だと説く。それを防ぐ唯一の方法は、女性たちがかつてそうであったように、家族と国民の存続のために子どもを産み育てることに人生の喜びを見いだすことであるが、その望みはなさそうである⁽¹⁹⁾。なぜそうなったのか。第2章では、ベビーブーマーが成長して1960年代に若者として豊かで解放的な文化に浸るようになってから、母親と同じような人生を歩みたいと思わなくなったことが指摘される。

1960年代の性革命と個人的な事柄を聖域化する新たな道德観の出現を経て、女性の間でピルの服用や妊娠中絶が横行するようになり、乱交に対する抑制も効かなくなってきた。ロウ対ウェイド判決以来アメリカでは中絶手術の件数が4千万件にのぼり、白人人口が増えない要因となっている。ベビーブーマーは、戦争も苦勞も知らずに育ったが、彼らの価値観を形成する上で影響力を及ぼしたのはテレビ、映画、舞台、雑誌、音楽であり、プレイボーイ誌に代表されるような快楽主義的なメッセージにどっぷり浸かった⁽²⁰⁾。

では、伝統的なキリスト教思想と比べて、新世代の倫理観はどのような教義に支えられているのか。第3章ではそれが問われる。新世代の世俗的な教義では、第一の戒律としてすべてのライフスタイルは平等であること、第二の戒律として一方的な判断をしないこと、が求められる。しかし、実際のところ、それらの戒律は、ある人があるライフスタイルを批判した場合、その人は間違っていると一方的に判断されることになるという矛盾をはらんでいる。

たとえば、従来のキリスト教道德では婚外セックスや同性愛を戒めてきたが、新しい教義では、そのような戒めは自由恋愛や同性愛というライフスタイルを弾圧する悪事として断罪される。そこで、伝統主義者のブキャナンは、新しい教義は本当は平等を目指しているのではなく、新たな道德的ヘゲモニーを確立したいだけだと考える。新しい教義では、白人のヘイトクライ

ムが最も厳しく糾弾されるが、マイノリティが加害者で白人が被害者だとほとんどニュースにもならないことが平等なのか。新しい教義では、西洋の歴史が他の文明の破壊者として描かれ、奴隷制、虐殺、植民地主義など犯罪の一覧表のようになっている。新たな教義はグローバリズムを奉じているが、ジョン・レノンが「イマジン」で歌ったような国境のない世界が理想とされ、愛国主義に懐疑の目が向けられるというのはいかがか⁽²¹⁾。

いまやキリスト教に取って代わったそうした新しい教義は、何に由来するのか。第4章では、その問いに対する答えとして、マルクス主義の理論家であるルカーチ (György Lukács) やグラムシ (Antonio Gramsci)、および彼らの理論を基礎とするアドルノ (Theodor Adorno) やマルクーゼ (Herbert Marcuse) からフランクフルト学派の影響が指摘される。

ブキャナンの説明によれば、ルカーチは社会主義革命の新しい価値観を世界に広めるためにはまず古い価値観を打ち壊す必要があると説いた。そして、グラムシはキリスト教思想を西洋における革命の障害と見なし、まずそうした西洋の文化を変革することから始めるべきだと考えた。彼らの思想は、フランクフルト学派に引き継がれ、中でもマルクーゼは1960年代に学生運動で絶大な支持を集めた。彼は性の解放を訴えた。また、彼は支配する側に対する寛容は結果的に抑圧につながることから、「解放的寛容」⁽²²⁾ すなわち右翼に対する不寛容と左翼に対する寛容を求め、新左翼を勢いづかせた。

もちろん、ブキャナンから見れば、マルクーゼの「解放的寛容」は二重基準であるが、その右翼に不寛容な左翼の武器は、やがてポリティカル・コレクトネスという形をとって全米に定着した。その間に、フランクフルト学派は、性の解放とフェミニズムを促し、その反面、女性の伝統的な価値は失墜させられ、家族制度は崩壊に追いやられた⁽²³⁾。

第5章では、西洋の死がどのように進むか、その様子が描かれる。西洋諸国で軒並み少子化が進む一方で、第三世界では人口が増加している。そしてアメリカには、中絶して生まれてこなかった4千万人分の空席を埋めるように、大量の移民が押し寄せている⁽²⁴⁾。

第6章では、不法移民を含むヒスパニック移民の増大が取り上げられる。ブキャナンによれば、国民性が異なる人々をこれほど大量に流入させることのリスクは計り知れない。しかし、文化エリートはむしろ多文化主義を唱道し、民主党は潜在的な票田として移民を大量に受け入れようとする。今やヒスパニック票はどの政党の大統領候補も無視できないほどの数に膨れあがり、また、大企業が低賃金労働者として彼らを必要としていることから、共和党政権までもがヒスパニック票にひどく気を遣うようになった⁽²⁵⁾。

第7章では、新しい教義のもとでアメリカの歴史が批判的に書き換えられ、偉人たちの評価が傷つけられるとともに記念碑や記念日の変更されるという問題が取り上げられる。第8章では、公立学校からキリスト教を追い払う最高裁の一連の判決によってアメリカが非キリスト教化されたことが批判された⁽²⁶⁾。そして、第9章ではそれらの議論を受けて、文化戦争における保守派の劣勢が論じられる。保守派は冷戦期以来、政治・経済・外交ばかり重視して文化戦争の準備を怠り、一方の革命派はMTV、映画、雑誌、学校、大学を牛耳ることで若者の価値観を形成してきた。文化戦争では常に革命派が攻め、保守派は防戦一方である。しかし、ブキャ

ナンは、そのような状況の中でも共和党が国政選挙を有利に運べる方法があるという。それは共和党がはっきりと白人に向けて支持を訴えかけることである⁽²⁷⁾。

最後に、第10章で文化戦争の今後が語られる。文化戦争は今後、幾世代にもわたって続くが、戦況を大きく左右するのは議会よりも学校、メディア、最高裁である。正直なところ、西洋復興の見通しは暗い。しかし、それでもアメリカという国には、そのために戦うだけの価値があるはずである⁽²⁸⁾。

4. パレオコンの思想と保守運動における主導権争い

『西洋の死』におけるブキャナンの主張は以上の通りであるが、その内容を深く理解するためには、彼が先頭に立って広めようとしたパレオコンの思想を掘り下げる必要がある。パレオコンとは、何に由来する、どのような思想であるのか。

思想史を辿ると、パレオコン（旧保守主義）とは、ネオコン（新保守主義）の台頭に反発した伝統主義者が名乗った立場である。そこで、まずネオコンとの対立について理解する必要がある。1960～70年代に左翼から転向したネオコンは、ユダヤ人など新移民の出身が多く、移民にも成功の機会を与えるアメリカ的民主主義の擁護者であるが、世俗的で、福祉を容認し、ウィルソン主義的国際主義者である点で、伝統主義者の思想とは異なる面が大きい。伝統主義者から見れば、ネオコンはよそから来たえせ保守主義の侵入者であり、保守と呼ぶに値しない存在である。そこで、パレオコンは、彼らに対応する形で1970～80年代に姿を現したのであるが、結局は戦後保守運動史における「異端者」「敗残者」の地位に甘んじることになる。ネオコンが『ナショナル・レビュー』など保守の論壇で次第に影響力を強め、共和党政権内に入り込む一方で、パレオコンはむしろ隅へと追いやられたのである⁽²⁹⁾。

ナッシュによれば、「ブキャナンの旧保守主義（Buchananite paleoconservatism）」は猛烈なナショナリズム、グローバル・デモクラシーへの懐疑、西洋的な文化を傷つける移民への恐怖、自由貿易に対する批判などを特徴とし、戦前の不干渉主義に回帰する傾向を示して、アメリカの保守サークルの中に調和しない要素を持ち込んだ。アメリカの保守思想は、軒並み政府の役割を限定する点で共通するが、反共主義でも共通しており、概して外交・軍事にかかる政府のコストについては例外的な扱いを受けた。そうした中で、孤立主義的なパレオコンの思想は異端視されたのである⁽³⁰⁾。

ただし、ナッシュの研究がバランスのとれた記述で定評あるものとされる一方で見逃すことのできないのは、漆畑智靖が指摘したとおり、人種主義的側面を十分深刻に考慮していない点である。その点を掘り下げた井上弘貴によれば、パレオコンの中心人物の一人フランシス（Samuel Francis）には「明確な白人至上主義」が確認されるという⁽³¹⁾。

たとえば、フランシスは1994年の「なぜ人種が問題か」という論考で、21世紀半ばに白人がマイノリティに転落するという統計局の予測に触れつつ、移民の増大と白人の出生率の低下を問題とし、白人差別（anti-white racism）の立法が増えるなど「控えめに言っても白人にとってこの国の状況はよくならない」と主張した。翌年の論考「人種的・文化的な生き残りの見通し」

では、「端的に言えば、解決策は合衆国の再征服だ」として「文化的な意味での白人の優越」を回復するために、第一に「白人としての人種意識」を高め、第二に移民や非白人の増加と白人の少子化という脅威に対抗し、第三にアフーマティヴ・アクションの廃止を含めマイノリティと反白人勢力に有利な法政治秩序を是正しなければならないと主張した⁽³²⁾。

こうしてみると、ブキャナンの『西洋の死』は、基本的にフランシスの論考を敷衍したものであり、論理的な構成を借りながらフランシスが強調した「人種」の概念を所々「文化」という言葉に置き換えたような印象を受ける。ブキャナンは、ニクソンの南部戦略がそうであったように、本当は人種問題を中心に据えながらもそれを直接扱うことを慎重に回避し、いわば暗号化された形で仄めかす方法をとったのかもしれない。フランシスは、ブキャナンが『西洋の死』の謝辞で最初に名前を挙げた彼の盟友である。パレオコンの思想と人種主義の関係性は、たしかに深刻に考慮されるべき問題であろう。そして、その問題は、白人至上主義、白人国家主義（White Nationalism）の傾向を持つオルト・ライト（オルタナ右翼）とのつながりを指摘されたトランプ政権の問題ともかかわってくるであろう。

さて、ここで1990年代から2000年選挙へと向かう現実政治に目を向けると、共和党主流派の主な関心は減税で、外交上の立場はグローバリズムであった。こと文化戦争に関して、クリストル（Irving Kristol）やポドレッツ（Norman Podhoretz）のようなネオコンは「サマータイム・ソルジャー〔根性なしの脱走兵〕」⁽³³⁾にすぎず、G・W・ブッシュの陣営は彼らの後継者たちに乗っ取られて、共和党は文化的・倫理的な問題で後手に回っているように見えた。

『西洋の死』の論調からは、ブキャナンが当時の政治状況にいかにも悲憤慷慨していたかが伝わってくる。1992年選挙に敗れたブキャナンは、文化戦争の敵であるクリントンと戦うためにブッシュ父を応援しようと共和党全国大会で決起を促したが、2000年選挙に敗れた後には、同書を著して文化戦争での劣勢を伝えるとともに、息子G・W・ブッシュが率いる共和党に苦言を呈した。共和党は揃いも揃って文化戦争に正面から立ち向かわなくなり、「人種・文化・生命の問題から逃げた」⁽³⁴⁾と非難したのである。

ブキャナンから見れば、それはレーガン主義からの逸脱である。2000年当時の共和党は、減税と小さな政府、自由貿易の推進、国防力の再建などの点でレーガンの政策を引き継ぐ決意を固めているように見えたが、その一方では党大会で生命倫理に関する発言を控えさせるなど、社会的・倫理的な問題では及び腰になっていた。レーガン時代の共和党は、もっと信仰を大切に、道徳的な確信を抱いていたはずである。しかし、今や共和党からその確信が失われてしまった。G・W・ブッシュ陣営は党大会に多くの黒人を登壇させ、移民を擁護し、「思いやりのある保守主義」を掲げたが、彼らは保守であっても偏屈者の集まりではないと大衆に信じてもらえるよう、怖ず怖ずとしているようにしか見えなかった⁽³⁵⁾。

そして、ブキャナンは今後、共和党が国政選挙を有利に運ぶために、より明確に白人をターゲットとすべきことを提案した。ニクソンは白人票の67パーセント、レーガンは64パーセントを獲得したが、G・W・ブッシュは54パーセントしかとれないから苦戦した。しかし、マイノリティという敵の岩盤支持層を攻略するためにエネルギーを浪費しなくても、白人票を60

パーセント固めれば選挙に勝つことはできるのであり、それ以外の票はなくても困らない、という計算が成り立つからである。

具体的に言えば、白人男性は、アフーマティヴ・アクションや逆差別の犠牲者であり、学者やジャーナリスト、フェミニスト、公民権運動家による格好の攻撃対象とされてきたが、アメリカの中間層の中にそうした攻撃者を快く思っている者はいない。そこで、共和党は人種・移民政策を見直して、「サイレント・マジョリティ」にアピールする戦術をとるべきである。2000年選挙では白人富裕層が左傾化して民主党寄りに、白人労働者層が右傾化して共和党寄りになるという現象が起きたが、鍵となったのは経済ではなく文化的争点であり、中絶問題を始めとして伝統的な価値観を擁護することが重要だ、というのである⁽³⁶⁾。

ブキャナンがこの文脈でサイレント・マジョリティという言葉を主に白人労働者層を前提として使用していることは明らかである。もともとその言葉はニクソン政権時にブキャナンが考案し、最初はヴェトナム反戦運動との兼ね合いで用いられたが、まもなく労働者層を民主党から切り崩すための選挙戦術として利用された⁽³⁷⁾。さらに、1970年代のニューライトの運動において、エリート層に不満を抱きつつも十分に動員されていない白人中間層が多くいることが注目される中で、フランシスは「ミドル・アメリカン・ラディカルズ」と名付けられたそれらの人々に働きかけるポピュリズムの戦略を考案した。井上によれば、その中で強調されたのがグラムシに学んで「文化的ヘゲモニー」を奪取するという政治課題である。会田弘継は、ブキャナンが採用したその選挙戦略が2016年選挙でトランプに伝わったと指摘している⁽³⁸⁾。

ブキャナンは、『西洋の死』の最終章で次のように述べている。「西洋の古くからの信条、文化および国家を保持するためのこの闘争が右翼と左翼を分ける新しい分水嶺となる。そして、その闘争が保守主義とは何を意味するかを定義づけることになるであろう」⁽³⁹⁾。このようにして、ブキャナンは、アメリカの文化戦争をして保守とリベラル、民主党と共和党の主な対立軸とし、その戦いを通じてパレオコンが保守主義の異端から正統への転換を果たし、ネオコンに乗っ取られた共和党を奪回することを夢見たのである⁽⁴⁰⁾。

5. パレオコンと「文化マルクス主義」論

以上で述べてきたとおり、『西洋の死』は、伝統的な西洋文化の保持をして保守主義を定義づける中心的な課題にしたいというパレオコンの思想運動の中で著されたものであった。

同書の執筆の直前に行われた2000年選挙は、民主・共和両党の中傷合戦よりも政策論争を中心に展開されたが、ブキャナンの見方は厳しかった。文化戦争でアメリカが「二つの国」に分かれているというのに、二大政党の政治的な違いは「取るに足りないもの」⁽⁴¹⁾でしかなかったというのである。G・W・ブッシュが選挙戦でしきりに訴えたのは減税である。なるほど、大方の保守派は納得したかもしれないが、「しかし、もし全世界を手に入れても自分の国を失う憂き目に遭うとしたら、いったい何の得があるのか」とブキャナンは嘆いた。

GDPが2か3か4パーセント伸びることは、西洋文明が持ちこたえ、我々が神のもとに一

つの国民であり続けることと同じくらい大切だとでもいうのか。出生率の凋落、国境の開放、反西洋の多文化主義の勝利に直面した今日の問題とは、独立した唯一の国民としてのアメリカ、そして西洋それ自体の生き残りなのである。それなのに、我々の命運を賭けた前回の大きな戦いでは、あまりに多くの保守主義者が敵前逃亡する有様であった⁽⁴²⁾。

ブキャナンは、共和党が2000年選挙に勝利したとはいえ、民主党ゴア (Al Gore) とアメリカ緑の党ネーダー (Ralph Nader) の得票をあわせると G・W・ブッシュを300万票も上回ったことに強い危機感を覚えた⁽⁴³⁾。民主党側にはマイノリティを擁護するためのポリティカル・コレクトネスという武器があるので、共和党主流派はあえて文化戦争の渦中に飛び込みたくない様子であった。それでは、ブキャナン自身は、どのような反撃の手段があると考えたのか。

当時の彼が出した一つの答えは、ルカーチ、グラムシや、マルクーゼらフランクフルト学派による西洋文明の破壊の脅威を煽り、まるでそれに与するかのようなりベラル派に対する白人の反発と嫌悪感を呼び起こすことであったと考えられる。実際、『西洋の死』では、彼らの思想とその影響が「文化マルクス主義 (cultural Marxism)」としてたびたび否定的に論じられている。もとより「文化マルクス主義」という概念はフランクフルト学派自身によるものではないし、一般に学術的な分類として使われてきたものでもない。それは、よく言っても保守運動の中で造られた批判のための用語であり、陰謀論として否定されることも少なくない⁽⁴⁴⁾。

アメリカ保守運動の中でポリティカル・コレクトネスの正体は「文化マルクス主義」であると説明された初期の例として、キリスト教右翼の政治団体「モラル・マジョリティ」の名付け親であるニューライトの中心人物ワイリック (Paul M. Weyrich) が1999年2月に保守の同胞たちに宛てた書簡が挙げられる⁽⁴⁵⁾。

『西洋の死』での説明を引用すれば、「ポリティカル・コレクトネスとは、文化マルクス主義であり、宗教裁判で宗教的な異端を罰するのと同じように、反対者を処罰し、社会的異端の烙印を押すための制度である」。その制度は、反体制派知識人を精神病院に送った旧ソ連の方法を模倣したものであり、違反者には「外国人恐怖症 (xenophobe)」「同性愛恐怖症 (homophobia)」などの病名がつけられる。しかも、通常の裁判とは反対に「推定有罪」の原則が適用されるので、被告は自ら無罪を証明しなければならぬ状況に追い込まれる⁽⁴⁶⁾。

ポリティカル・コレクトネスは、1980年代以降、多くのメディアやエリートによって推奨されたが、そのために窮屈な思いをして、内心疲れているアメリカ人は多いといわれる。しかし、もしブキャナンの説明どおり、ポリティカル・コレクトネスがアメリカの伝統文化を破壊する「マルクス主義」の企みに由来するならば、違反の疑いをかけられた人は必死に自己弁護する必要などないし、ただ堂々としていればよい。そして、むしろポリティカル・コレクトネスで無遠慮に他人を攻撃するような人の人格を疑えばよい、ということになるのである。

リベラル系のメディアやポリティカル・コレクトネスに対して挑戦的なトランプ大統領の発言は、もっぱら個人的な性格の問題に帰せられるものではなく、このような保守運動の流れを背景として意識的に準備された政治姿勢であると考えられるのである。

おわりに

パレオコンの思想は、ネオコンとの対立の中で現れた。ネオコンは、アメリカ人を共通のイデオロギーで結ばれた集団と考え、移民の受け入れに比較的に寛容であり、アメリカのイデオロギーを世界に広げることを目標とする。しかし、パレオコンのブキャナンは、アメリカ人を伝統的な文化、信仰、歴史、英雄、休日を共有する国民と考えるので、移民や外交問題に関する考え方が大きく異なる。ブキャナンの考えでは、異なる文化圏の移民を受け入れてアメリカ国民を帝国で暮らす雑多な人間の寄り合い所帯のようにするべきでなく、アメリカ帝国を世界に押し広げるために国民がコストを支払うことにも意義はない。

パレオコンの思想は、トランプ政権の発足によって日の目を見るようになったが、そのことには、ネオコン側の失敗がかかわっている⁽⁴⁷⁾。冷戦の終結後、ネオコンは、アメリカの民主主義をグローバルに拡大するという目標に重点を置き、国内の白人労働者が窮境に追い込まれているのを尻目に中東で戦争を強行して失敗した。トランプにとっては、ブキャナンが使った「アメリカ・ファースト」のスローガンを借りて、ニクソンが掘り起こしたような「忘れられたアメリカ人たち」に訴える絶好の機会が巡ってきたのである⁽⁴⁸⁾。

ブキャナンは2016年選挙について「私がブッシュに挑んだのとまったく同じ争点をトランプが拾い上げたことに高揚して喜んだ」⁽⁴⁹⁾と回想する。悲観論者のブキャナンは、本当にトランプが当選できるとは信じていなかったが、彼が当選したときには、彼自身も報われた気がしたという。差別主義者だの外国人恐怖症だのと散々に叩かれ、共和党内でものけ者扱いされてきた彼の思想が拾い上げられ、貿易・移民・介入主義などに関するそれまでの共和党の基本路線に変更が加えられることになったからである。

ただし、トランプがパレオコンの思想に利用価値を見いだしているのは間違いないが、本心から思想を共有しているかはまた別の問題である。シリアへの空爆や大規模なインフラ整備の提案などは、トランプがパレオコンの思想を借りつつも機会主義的なポピュリストであることの証左と考えられる。アメリカの保守運動で使われる言葉に「思想こそが結果をもたらす (Ideas Have Consequences)」(Richard M. Weaver) というのがあるが、トランプ主義はパレオコンの思想そのものと見なすのではなく、それが生み出した一つの結果と見るべきではないか。

ブキャナンはトランプ政権の成立について「思想はうまくいったよ (The ideas made it)」 「私はうまく行かなかったけれども」と笑いながら語った。ただ、悲観論者のブキャナンは、トランプ政権の成立はよかったけれども結局は遅きに失したと考えている。あるいは、そうでなくても、これが最後のチャンスだと⁽⁵⁰⁾。

ブキャナンは、アメリカが1950年代に戻れるとは思っていないが、伝統的な姿を残せなければ国を失うのも同然だと思って、時に偏屈者と言われ、白眼視されながら、勝ち目のない戦いを続けてきた。1955年、戦後アメリカ保守運動の起点とされる雑誌『ナショナル・レビュー』の創刊に際して、バックリー (William F. Buckley Jr.) は「誰もそうしなくなったり急かされたりしたくないときには歴史の前に立ち塞がり、止まれと叫ぶ」⁽⁵¹⁾ ことが使命であると述べた。ブキャナンが押された人種主義者の烙印が消える日は来ないかもしれないが、彼もそれ

と同じような心境で戦ってきたのではないか。

注

- (1) Jeff Greenfield, "Trump Is Pat Buchanan with Better Timing," *POLITICO Magazine*, September/October 2016. Accessed November 21, 2019, <https://www.politico.com/magazine/story/2016/09/donald-trump-pat-buchanan-republican-america-first-nativist-214221>. 日本では、会田弘継が同選挙中にトランプが「ブキャナンの政策をコピーしている」ことを指摘した。『トランプ現象とアメリカ保守思想——崩れ落ちる理想国家』(左右社、2016年) 192頁。
- (2) Robert Shogan, "Buchanan Starts 'America First' Bid for President," *Los Angeles Times*, December 11, 1991. Accessed November 21, 2019, <https://www.latimes.com/archives/la-xpm-1991-12-11-mn-149-story.html>.
- (3) paleoconservatism には今のところ定訳がない。古保守主義、原保守主義、ペイリオ・コンサーヴァティズム等と紹介されることもある。保守思想史におけるパレオコンについては、George H. Nash, "The Conservative Intellectual Movement in America: Then and Now," *National Review*, April 26, 2016. Accessed November 21, 2019, <https://www.nationalreview.com/2016/04/conservative-intellectuals-george-nash/>; Idem, *The Conservative Intellectual Movement in America Since 1945* (Wilmington, Delaware: ISI Books, 2006), pp. 368-370 を参照。日本語の文献は少ないが、漆畑智靖「アメリカ保守主義運動に関する一考察 1: 保守主義運動の敗者の視点から」(『恵泉女学園大学紀要』第23号、2011年2月) 65-89頁が先駆的である。パレオコンの中でもフランスの思想に焦点を当てたものとして、井上弘貴「ドナルド・トランプに先駆けた男——サミュエル・T・フランスのペイリオ・コンサーヴァティズム」(『アメリカ研究』第52号、2018年5月) 63-85頁を参照。
- (4) Patrick J. Buchanan, *The Death of the West: How Dying Populations and Immigrant Invasions Imperil Our Country and Civilization* (New York: St. Martin's Press, 2002). [邦訳『病むアメリカ、滅び行く西洋』宮崎哲弥監訳、成甲書房、2002年]
- (5) Nash, "The Conservative Intellectual Movement in America."
- (6) Francis X. Clines, "Trump Quits Grand Old Party for New," *The New York Times*, October 25, 1999, ProQuest (2234296196).
- (7) Tim Alberta, "'The Ideas Made It, But I Didn't': Pat Buchanan Won After All. But Now He Thinks It Might Be Too Late for the Nation He Was Trying to Save," *POLITICO Magazine*, May/June 2017. Accessed November 21, 2019, <https://www.politico.com/magazine/story/2017/04/22/pat-buchanan-trump-president-history-profile-215042>. See also David Mark, "Trump Apologized to Pat Buchanan for Calling Him an Anti-Semite Who 'Doesn't Like the Blacks,'" *Washington Examiner*, July 21, 2019. Accessed November 21, 2019, <https://www.washingtonexaminer.com/news/trump-apologized-to-pat-buchanan-for-calling-him-an-anti-semite-who-doesnt-like-the-blacks>. トランプは2011年5月に翌年の大統領選挙に出馬しない意向を発表するまで数カ月間にわたり準備をしていたところであった。Elspeth Reeve, "Donald Trump Is Not Running for President: But He Still Thinks He Could Have Beat Obama in 2012," *The Atlantic*, May 16, 2011. Accessed November 21, 2019, <https://www.theatlantic.com/politics/archive/2011/05/donald-trump-not-running-president/350721/>.
- (8) "Pat Buchanan Biography," *Notable Biographies*. Accessed November 21, 2019, <https://www.notablebiographies.com/Br-Ca/Buchanan-Pat.html>. ブキャナンの自伝として、Patrick J. Buchanan, *Right from the Beginning* (Boston: Little Brown, 1988).
- (9) Buchanan, *The Death of the West*, pp. 134-136. [邦訳、184-186頁]

- (10) “Pat Buchanan for President 1992 Campaign Brochure,” *Presidential Campaigns and Candidates*. Accessed November 21, 2019, <http://www.4president.org/brochures/1992/patbuchanan1992brochure.html>.
- (11) Patrick J. Buchanan, “American First—and Second, and Third,” *National Interest*, No. 19 (Spring 1990), pp. 81–82.
- (12) Idem, *Where the Right Went Wrong: How Neoconservatives Subverted the Reagan Revolution and Hijacked the Bush Presidency* (New York: St. Martin’s Press, 2004), p. 14. See also Idem, *Suicide of a Superpower: Will America Survive to 2025?* (New York: St. Martin’s Press, 2011), pp. 367–371. [ブキャナン『超大国の自殺——アメリカは、二〇二五年まで生き延びるか?』河内隆弥訳、幻冬舎、2012年、458–463頁]
- (13) “Pat Buchanan for President 1992 Campaign Brochure.”
- (14) ペロートとブキャナンは保護主義の点で意見が一致したが、中絶反対など社会問題では意見が対立していた。Michael Janofsky, “The 2000 Campaign the Reform Party: Perot Is Unlikely to Challenge Buchanan, His Aide Says,” *The New York Times*, June 6, 2000. Accessed November 21, 2019, <https://www.nytimes.com/2000/06/06/us/2000-campaign-reform-party-perot-unlikely-challenge-buchanan-his-aide-says.html>.
- (15) Buchanan, *The Death of the West*, pp. 1–6. [邦訳、15–22頁]
- (16) James Davison Hunter, *Culture Wars: The Struggle to Define America* (New York: Basic Books, 1991).
- (17) “1992 Republican National Convention Speech,” August 17, 1992, *Patrick J. Buchanan Official Website*. Accessed November 21, 2019, https://buchanan.org/blog/1992-republican-national-convention-speech-148?doing_wp_cron=1573550443.3652210235595703125000.
- (18) Buchanan, *The Death of the West*, pp. 7–9. [邦訳、22–25頁]
- (19) Ibid., chap. 1, esp. p. 24. [邦訳、第1章] かくいうブキャナンには子どもがいない。
- (20) Ibid., chap. 2. [邦訳、第2章]
- (21) Ibid., chap. 3. [邦訳、第3章]
- (22) H・マルクーゼ、R・P・ウォルフ、B・ムーア・jr.『純粹寛容批判』大沢真一郎訳（せりか書房、1968年）141頁。
- (23) Buchanan, *The Death of the West*, chap. 4. [邦訳、第4章]
- (24) Ibid., chap. 5. [邦訳、第5章]
- (25) Ibid., chap. 6. [邦訳、第6章]
- (26) Ibid., chaps. 7–8. [邦訳、第7～8章]
- (27) Ibid., chap. 9. [邦訳、第9章]
- (28) Ibid., chap. 10. [邦訳、第10章]
- (29) 注(3)の文献を参照。引用は漆畑、前掲論文、71、72頁。
- (30) Nash, *The Conservative Intellectual Movement in America Since 1945*, p. 369.
- (31) 漆畑、前掲論文、86頁；井上、前掲論文、77頁。
- (32) Samuel Francis, “Why Race Matters,” *American Renaissance Magazine*, Vol. 5, No. 9, September 1994. Accessed November 21, 2019, <https://www.amren.com/archives/back-issues/september-1994/>; Idem, “Prospects for Racial and Cultural Survival,” *American Renaissance Magazine*, Vol. 6, No. 3, March 1995. Accessed November 21, 2019, <https://www.amren.com/archives/back-issues/march-1995/>.
- (33) Buchanan, *The Death of the West*, p. 256. [邦訳、327–328頁]
- (34) Ibid., p. 224. [邦訳、289頁]
- (35) Ibid., pp. 206–207. [邦訳、267–269頁]
- (36) Ibid., pp. 221–222. [邦訳、286頁]

- (37) Monte Paulsen, "Buchanan Inc.," *The Nation*, November 4, 1999. Accessed November 21, 2019, <https://www.thenation.com/article/buchanan-inc/>; Matthew D. Lassiter, "Who Speaks for the Silent Majority?" *The New York Times*, November 2, 2011, ProQuest (2216454724). ニクソンは、公には黒人もサイレント・マジョリティに含まれるという慎重な立場をとったが、選挙戦では主に白人有権者にアピールするためにその言葉が使用された。
- (38) 井上、前掲論文、71頁；会田、前掲書、193-194頁。
- (39) Buchanan, *The Death of the West*, p. 229. [邦訳、296頁]
- (40) 漆畑、前掲論文は、敗残者としてのパレオコンが保守主義のオーソドクシー（正統教義）を修正しようと試みたという着眼点が大いに参考になった。ただし、筆者が確認できた限り、前掲論文として公表されたのは第1章のみであり、完結していない。
- (41) Buchanan, *The Death of the West*, p. 6. [邦訳、21-22頁]
- (42) Ibid., p. 96. [邦訳、136頁]
- (43) Ibid., p. 224. [邦訳、289頁]
- (44) たとえば、歴史学者モイン（Samuel Moyn）によれば、「文化マルクス主義」というものは「現実には存在しない」。それは反ユダヤ主義の陰謀論である。Samuel Moyn, "The Alt-Right's Favorite Meme Is 100 Years Old: 'Cultural Marxism' Might Sound Postmodern But It's Got a Long, Toxic History," *The New York Times*, November 13, 2018, ProQuest (2133534174)。なお、注(45)の書簡の中でワイリックは大文字のCを使って Cultural Marxism と固有名詞のように表記しているが、ブキャナンは小文字のcを使って cultural Marxism と表記している。
- (45) Paul M. Weyrich to Ms. Amy Ridenour, February 16, 1999. Accessed November 22, 2019, <https://nationalcenter.org/ncppr/1999/02/16/letter-to-conservatives-by-paul-m-weyrich/>.
- (46) Buchanan, *The Death of the West*, pp. 89-90. [邦訳、128-129頁]
- (47) リンド（Michael Lind）は「ネオコンはトランプ主義に責任がある。長年にわたり、ネオコンはアメリカの白人労働者に背を向けてきたから」と主張する。Michael Lind, "The Neocons Are Responsible for Trumpism: For Years, Neoconservatives Turned Their Backs on White Working Class Americans," *The National Interest*, March 7, 2016. Accessed November 21, 2019, <https://nationalinterest.org/feature/the-neocons-are-responsible-trumpism-15417>.
- (48) 思想史に限らず、アメリカ史のより広い文脈の中でトランプ大統領の当選を論じた論考として、拙稿「素人大統領の登場とアメリカ政治の現段階——トランプ・ポピュリズム・グローバル化」（日本国際政治学会『国際政治』第192号、2018年3月）113-128頁。
- (49) Alberta, "The Ideas Made It, But I Didn't."
- (50) Ibid.
- (51) William F. Buckley Jr., "National Review's Mission Statement," *National Review*. Accessed November 21, 2019, <https://www.nationalreview.com/1955/11/our-mission-statement-william-f-buckley-jr/>.